



## 専門医としての経験と責任感で、 糖尿病治療の個別化に臨む

2013年9月取材

山梨県笛吹市  
中里内科クリニックDM 院長  
中里 稔 先生

患者さん中心の医療を実現するために、まずはじっくりと話を聞き、その患者さんにはどのような治療や指導が適切かを模索しながら、望ましい医療を提案すること——。中里内科クリニックDM院長の中里稔先生は、そこに注力して初めて、糖尿病専門医としての価値が生まれると言います。

### 糖尿病治療は対話から始まる

中里先生は、大学卒業後の医局入局時から糖尿病をはじめとする内分泌疾患を専門に選んだ理由を、「内分泌の世界は、どれだけ勉強を重ね、知識を得るかで勝負できる部分が多いので、長く第一線で関わることができると思ったのです」と語ります。そして、その後の臨床を通して、糖尿病治療が対話から始まることを実感し、“ペイシエント・センタード・メディスン(患者さん中心の医療という考え方)”を核として診療に取り組んできました。そんな糖尿病治療を地域で実践するため、2006年に同クリニックを開業した中里先生。院名の末尾に「DM」と記してあるのも、その強い思いからに他なりません。現在、同クリニックに訪れる患者さんは慢性疾患が95%を占めますが、このうち糖尿病患者が78%で、その数だけで1,000名近くに及びます。



「できるだけ“心地良い”医療を提供する」という方針が受付や待合室等の空間づくりにも反映され、間接照明等により柔らかな雰囲気醸し出されています。

### 2時間をかけるきめ細かなヒアリング



患者さん指導用の部屋は2室あり、家族なども一緒に話を聞けるようにゆったりとしたスペースが確保されています。

「糖尿病の場合、食事や運動について患者さん自身が努力しなければ治療効果には限界がありますから、おのずと患者さん中心の医療を行う必然性が生まれたのです」と中里先生。日常診療では個々の患者さんとの対話を重視しています。初診では日本糖尿病療養指導士の資格を持つスタッフが約2時間をかけてヒアリングを行い、その内容を迅速に電子カルテに入力。その情報を把握した上で、中里先生の診察が始まります。患者さん1名の診療に少なくとも10分をかけ、自作のスライドを供覧しながら、病気や治療について説明を行い、視覚的な理解を促します。スライドは基本セットで約170枚に及び、さらに動脈硬化や腎疾患の解説用なども用意されていて、その中から患者さんに必要な内容を選んでいきます。

### 個々の患者さんに専門医だから言える一言を

糖尿病治療においてますます重視されている“治療の個別化”に対しても、中里先生は積極的に取り組んでいます。例えば、高齢の患者さんの場合、「低血糖を回避する意味も含め、合併症のない症例ならばHbA1cが8%のコントロールでも可である」という、新しい知見に基づいた診断を下し、患者さん本人や家族にその根拠を解説します。「つい最近まで、血糖はもっと低く抑えることが望ましいとされてきましたから、『これからは8%でいいですよ』とは一般内科では言いにくいかもしれませんが。それを判断し、患者さんにしっかりと理解を促すことが専門医としての私のアイデンティティーであると考えています」。そのために1日中話し通しになることもたびたびあるという中里先生。そんな熱意が伝わるからこそ、同クリニックを訪れる患者さんが後を絶たないのでしょう。



血管内皮機能を評価するFMD検査機器は、山梨県内で1台だそうです(2012年導入時)。動脈硬化を早期発見でき、糖尿病患者の場合はほぼ全例で異常が認められると言います。